

数通流茂遠志(三)：先達の通信教育

中野, 三敏

<https://doi.org/10.15017/4742027>

出版情報：雅俗. 13, pp.123-129, 2014-07-15. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



数通流茂遠志 (三)

—先達の通信教育—

中野 三敏

(十六) 中村幸彦先生 (二)

昭和四十五年一月四日 封書

めでたく御迎春の御事と賀し奉ります。

先般は折角御来訪いただきましたに、とり込み中にて誠に失礼いたしました。が、春窓秘辞御入手の御事は結構なことでございます。博多にてもめったにない掘出し物とお祝ひ申し上げます。

昨日は若狭の佳魚沢山に御恵与下され正に拝受仕りました。折から春日君 (和男先生) 来訪中で御振舞もし、私どもは賞味させていただきますました。誠に佳魚にて、一同酒も大いにす、みましたことで、御芳情忝く御礼申し上げます。

旧臘廿日、京都で中公の高梨専務等と逢ひまして、「洒落本大成」(仮称) のこと、広島で箱などのこと色々と相談いたし、大体承知してもらいました。ただ四六版にして三四十冊になることは、配本の点からも、もう少し少い方がよくないか、大系の大きさにすれば三千五百円 (部数のこと一寸失念) 位になるなどあり、それでは皆様に御相談しないが実用本位に考へて、も一度菊版に見つもってほしい、その上皆様に御相談するなど話して参りました。所収書目の件、御多忙ながらよろしくお願ひいたします。解説では後刷本の写

真を入れてよいかと問ひました処、自由にしてよろしいとのこと、これで書誌的な説明かなり便利になると思ひます。本文二行の処の細字も大系より大きくすることも承知いたしました。いづれ四六、菊の確定次第、組見本を作ってもらふ事にいたします。

くどくどと書きまして酔中のこと御許し下さい。本年もよいお年でありますことを御祈りいたしまして、御礼まで

敬具

一月四日

※ これはまだ名古屋在住の頃のこと。十二月中に九州へ帰り、九犬前のかねた書店で「春窓秘辞」を手に入れ、早速中村先生へ御見せした所、院生連中が、名古屋から来た学生にこんな物をさらわれるとは何事かと大いに叱られたという話は、後で中山右尚君に聞かされたことだった。

若狭の佳魚云々は、僕が淑徳在任中の教え子で田中文子さんという学生に送って貰ったのが初めてで、余り美味しいので、御酒の御供には何よりと先生に御送りしたものだ。それ以来重宝しているが、確かに他店のより数倍美味い。(田中平助商店という。)

洒落本大成のことは、大方、中村先生に話をつけて貰い、所収書目

云々は中村先生御自身のノートを提供して戴けたが、僕自身も洒落本研究で身をたてたいと思い初めた矢先だったので、自分の調査資料をメンバーに提供するなど、真っ平御免と思っていたのが、先生のノート提供で、成る程こういう身の処し方もあるのだと思いついて、それに倣った事を今も思い出す。但しその一つ一つを、浜田啓介氏のみは全部当り直して下さって、後に長沢先生の「書誌学」に「所見洒落本書誌」を連載させて貰う時にはそれに啓発された所も多い。

(十七) 中村幸彦先生(二) 昭和四十六年十一月三十日 封書

(前略) 九大文学部教授会にて貴方様お迎へ申すことの決定のこと、今井氏からも直に連絡ありましたこととであります。月並な詞ながら先づはお目出とうと申すべきと存じ上げます。

大丈夫のこととは確信しながら、古風な方も一二これ有り、今井氏が若干苦勞されるのかと老婆心的心配もいたしました。左様なこと全くなき、貴方をお迎へすることになりましたこと、改めて九大文学部へ敬意を表すると申しやるつもりで御座います。白石君の言葉をかれば、九大として近來になき快人事と申すべきと存じます。九大文学部は、今申す古風な方も一二ございますが(この人々も来年定年)、古い気むつかしい空気の古い大学としては珍しくない処でありますので、特に国文学の諸君は皆よい方々でありますので、よろこんで貴方様をおむかへいたすことで御座いませう。多少の地方的な不便もあるかも知れませぬが、中央と適当な距離にあるとも申せますので、落つて学問を大成なされる処ではないかと存

じます。いづれ御用が御座いますれば九大の事情など、又改めてお話し申し上げますが、これ迄私の担当の処を貴方様におつぎいただくこと、私としまして大変嬉しく存じますことを申し上げ、又、今後の御尽力をお願いいたします。

先般お話いたしました洒落本の会合の件、関西の二氏も正月にしては(と申すは関西の他事を片づけておきたいこともありまして)と云ふ意見であり、神保さんの方も山口(剛)先生著作集の御仕事などいそがしいこともと存じまして、年末は見送ってとは話し合っており居ります。貴方正月では如何で御座いませうか。

先づは御あいさつ迄で御座います。 敬具

十一月廿日

※ 右は私の九大転職の祝辞と中公の「洒落本大成」の刊行に関する会合の打合せ。本来は他見を憚る所もあるかもしれぬが、事情、面白所もあり、敢て載せる。今井先生、未熟な私ごとで、二、三の古風な先生を納得させる為に大奮闘を御かけした事、また白石さんの暖い眼差しなどは既に「本道楽」にも記したので、ここには略す。

「洒落本大成」は昭和四十七年の正月の会合から始まったことはすっかり忘れていたが、本手簡を見て初めて想い致った次第。これらが大変なことになろうとは全く想い致らなかった。

中村先生から博多の古書肆中田安彦氏に宛てた手紙が、何故か今、私の手元にある。中田さんは中村先生から貰った事が嬉しくて、私に手渡してくれたものでもあろう。中田さんは大川の家具屋のボンボンで、それが本好きで、あろう事か家具屋を放り出して古書肆になつて

しまった。当人に聞けば「ナニ、どうせ元は材木とパルプですから」と笑っていたが、晩年は資金に窮して、佐賀の古本屋さんの番頭のような事で終ったのは気の毒だった。九大の書庫には中田さんや大久保という本屋が中村先生の許に持ち込んだ本がかなりあった。その一つに中村先生が家宝にしておられた宋版の聚珍本があり、最初九大図書館へ持って行けと言われた所、図書館でこわったので、仕方なく私が買いましたと言われたのを思い出す。その葉書には「大川市榎津水入町四二五 中田安彦様」とあって、

鬱々しい此頃でございます。お元氣の事と拝察いたします。心斎橋の中尾さんから平戸維新館蔵版の白鹿洞書院揭示講義をいただきました。何時もお心かけ下され有難く頂戴いたします。地方版のことも長沢先生の記念論文集に一寸書くつもりでありますが、出ましたら御覧いただきます。

九大は中野氏が行かれたこと御存知と存じます。本好きでございますのでドン／＼と持込まれる事よろしかるべしと存じます。御礼迄で御座います。何卒御自愛下さいます様に。草々

とある。心斎橋の中尾さんとは松泉堂の弟さんで良夫氏のこと。当時は九州に古書が覆在することに逸早く目をつけて、しばしば九州に現われた。豊中住の先生には良い伝手であつたろう。地方版（田舎版）の事は長沢先生の古稀記念論文集に纏められている。

中野の所へドンドン持ち込めとあるのは、中村先生の時代と違って、かなり研究費が逼迫した状況となり、今井先生とも相談して「文系基礎学の危機」と題した一冊を岩波書店（ブック・レット）から出したりしていたので、それを御参照願いたい。この状況は未だに全く

改善されていないので、我々の努力は何だったのかと言いだくなる現状である。

（十八） 浜田義二郎先生（三） 昭和五十二年十月九日 封書

拝啓、秋ふかく愈々御健勝と存じます。（中略）佚山と蘭台は初めて拝読しますが、まだ大我その他貴台ならではの人物も多く続崎人伝を御待申ます。先日は今皿など冗談を申せしばかりに、不相応のことでお願を申し上げ汗顔の至りです。

先は不取敢御礼まで。山路閑古追悼の会へこれから参ります。

※ 右は拙著「近世新崎人伝」を御贈りした時の礼状。多くは「経済往来」という月刊誌に載せたものを、その都度御送りして、何かと情報をおねだりしていたのだったが、釈佚山と井上蘭台は別の雑誌に載せたので右の文章になったもの、「今皿（皿に濁点か）など冗談」とあるのは今や全く想出せない。

山路閑古老は古川柳研究会の主催者で、本来は共立女子大の化学の先生。当時鳴立庵主をつとめられた俳人であり、古川柳は趣味で歳廻りから主催者をつとめられたものか。王子の製紙博物館が会場で、山沢さんに紹介されて通っていたが、とにかく変り者が多く、一目を円くして御話を伺っていた。特に山路さんは温顔で御人柄に魅かれていたが、後年花咲さんからの聞き込みでは、御嬢さんの嫁入り道具を揃える為に、自分の経験を春本仕立てにして出版し、目出度く支度が整ったという。その現物の一揃いは今も太平書屋から出版されていて

荆妻死之節は遙かに御吊電賜はり、一生を貧学究に仕へて終りしもの、心筋梗塞とはいへ、留守中ひとり死なしめて後悔此事に候。されど
悪夫今さらに良夫づらして何かせむ
飲みは飲むべし涙こぼさじ
漸く人散じ、平生の如く仕事にかゝり居候間、御放念被下度候。
延引ながら御礼まで申上候。

※ 絶唱。これは自分の身に引きあてても大変よくわかる。先生はこれ以後めつきり瘦せられ、晩年は自ら食事も摂られることなかった様子は「本道楽」に書いた通りである。

(二十一) 野間先生 (三) 昭和四十六年十二月十八日

残口の墓いまだ御存知なきよし、吉田芝の墓にありて本名も刻しあり。五条朝日神明の神主なりし如く、先年尋ねたれど得る所なかりし。掃苔のメモ見当らず。近日再訪して御報すべし。今朝雨降りて足場悪くとりあへずお返事のみ。

(追伸) 観音堂のこととも実地に調べて御報すべし。

(二十二) 野間先生 (四) 昭和四十六年四月六日 葉書

朝日神明御調査ずみの由、さすがはと敬服致候。御上洛の節、前以て御連絡下され候はゞ芝の墓御案内可致候。小生この十一日所用にて名古屋へ参り候。時間あればお目にかゝりたし。

※ 右二通は、増穂残口の墓所と、神主をつとめた朝日神明に関するもの。この時芝の墓に始めて詣でて残口夫妻の墓を初見したが、後年(つい最近)一人では心細くて広瀬千紗子さんと再訪した所、場所を間違え漸く尋ねあてたが、既に無縁の為、鞍馬の山懐に捨てたと言われ、若しかしてと探した所、屏際につみ上げられた中に広瀬さんが発見してくれて、何とか取り留めた所が、再建を願ってみた所、墓地を買え



大雲院 中村家塋域

といわれ、仕方なく広瀬さんを頼って学校の中に暫くかくまって貰い、名古屋の服部君の伝手で、松虫墳の御寺の無縁墓地の中に安置する事が出来た次第は何かに書いたので、ここには措く。

野間先生には御足労戴き、帰りには蕎麦まで振舞って戴き、大いに恐縮した。

一方、朝日神明は、私が尋ねた当時、上坂福一という神主の代で、境内に心学舎があったのが目を引いた。上坂さんは大変御人柄の良い方で、古地図から残口当時の社地の一覧図を作っておられたのを見せて戴き、恐らく倭姫か太子像かと思われる木造の神像迄拝見することが出来たが、そのいきさつについても既報したので、ここには措く。

(二十三) 野間先生(五)

昭和四十八年七月八日 封書

梅雨薫蒸之砌、愈々御勝常大慶々々。去ル五月於東京学会之節はまたく珍らしき書物御貸与下され、いつもながら蒙を啓かれ候。御恩借の書物書留にて拝送致すべきや。或は洒落本の合宿に天理へお出かけの事もあらば、親しく御返しもせばやと存知居候。

さて昨日吉田神楽岡にて一代男輪講の節、中村君より中村三

近子墓の事頼まれ候。幸ひ大雲院は拙者領分のこと、十五日締切の由なれば誰煩はすまでもなく直接連絡すべしと請合申候(別紙)

二三日前入手候杉岡道啓の襄荷溪詩集の畑橘州序を見たところ、道啓に画餅山人の鴨東四時雜詞六十五首に和したる作ありと有し。もしならは見たきものと存じ居候。思はず我が田へ水を引き候。時節柄御自愛可被下候。

七月八日

般庵生

三敏秀才_{ル下}

二白 セーラーのふでペンといふもの初めて用ひたところ、いやは何ともいやなものにて大いに懲り申候。

本坊ハ昨夏八坂神社南ニ移転、塔頭_并墓ハ旧ノママ(朱ペン)

大雲院総墓地

<sub>河原町四条下ル
高島屋南裏</sub>

「白肅先生墓(墓誌略、三近子次男 講武 経学 安永六、九、十九病没 年七十)

巖父綱錦院三近心巖居士
慈母光照院明誉圓寿大姉」(正)

「寛保元辛酉霜月十日

中村平吾一蒼七十一

宝曆四甲戌十月十六日

久貝氏女行年六十六

」(背)

「

積道入 積妙意

(抱茗荷家紋)

瑞照院桂室素皎 「(左側)

「寛保元辛酉

塔頭信養院ノ檀那タルコトヲ示ス(朱ペン)

十一月十日

信養

綱錦院三近心巖居士 中村平吾 「

三近子ノ両親カ。総霊簿調査ノ時氣ツカズ見落シなり(朱ペン)

「慈母 惠林院……

嚴父 真解院…… 誌

令姉 法珠院…… 「(正)

「蓉花恵性

安養清心 「(左)

「元禄第十四歳龍輯辛巳

四月十六日

中村勘蒼建之 「(背)

三近子ノ兄ナルベシ(朱ペン)

「照月院墓」(正)

「天明二^{壬寅}年十二月十日

中村氏 「(左)

龍池禪房総霊簿 四<sup>自正徳辛卯
至寛保癸亥</sup>

※ 右は四条高島屋の裏に在った大雲院墓域の中に、且つて発見し、中村先生に御報告していたものと思う。野間先生も僕より数年早く発見され、盆や彼岸には水を手向けておられたことは別の著書でわかった。中村先生の三近子に言及された原稿は、今思い出せぬが、中村先生が野間先生に頼まれたと見える。「大雲院は拙者領分」とある辺り、いかにも野間先生らしくておかしい。大雲院も八坂神社南に移転し、墓は旧のままとあるが、まだ確かめてはいない。先日、残口墓や、龍草廬の黒谷に在った筈の墓も失なわれた今、上掲の三近子墓域の写真は貴重なものとなる。近年は三近子の事など教育学の研究者にも注目されているようで結構な事と思うが、研究の鳥羽口になる墓がこの様子では誠に頼りない。もう一度「京都名家墳墓録」の再調を若い人に御願したいものである。「御恩借の書物」云々は何であったか定かではないが、多分、端文仲の「春莊賞韻」ではなかったかと思う。応挙の端氏の肖像などが巻首に載る稀本だったように思うが、漢詩集の殆どは福大と一部分九大へ移したので今確かめようがない。

「洒落本合宿」云々には、それより先、軽井沢の中公別荘に野間先生が居られて、その合部屋で洒落本の合宿をやった事を覚えておられたものらしい。その時は僕は一番若手で、尾崎久弥翁や長沢先生の洒落本をトランク一杯にして運び屋をやっていたのを想い出している。